

アメリカ合衆国の巡回展示プログラム：スミソニアン協会のサイトをめぐって

著者	寺田 吉孝
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	16
ページ	161-173
発行年	2000-10-27
URL	http://doi.org/10.15021/00002181

第2章

アメリカ合衆国の巡回展示プログラム —スミソニアン協会のサイトをめぐって

寺田 吉孝

1. はじめに

私の勤務する国立民族学博物館では、1999年10月「みんぱく移動博物館」をスタートさせた。その実施にさきだって、端信行教授を代表として「移動博物館の実現化に方策に関する調査研究会」（1997年度）が組織され、国内外の移動博物館プログラムの実体調査をした。私は、その研究会メンバーとして1997年11月から12月にかけて、アメリカ合衆国の13の博物館を訪れ、その多くで巡回展示の担当者に話を聞く機会を得た¹⁾。以下の小文は、この調査で得た知見に基づいた報告である。私に与えられた任務は、アメリカ合衆国において巡回展示のプログラムがどのように組織され、運営されているかを調べることにあった。特に、世界最大規模のプログラムを運営するスミソニアン協会の巡回展示部の実態を視察し、民博において同様のプログラムを開始するためのノウハウや問題点を調査することが目的だった。そのためには、巡回展示の送り手であるサイトの企画・運営の実態だけでなく、受け入れ団体がどのようにサイトの巡回展示を利用しているのかをあわせて視察する必要があった。

2. スミソニアン協会のサイト・プログラム

スミソニアン協会が運営する巡回展示部（Smithsonian Institution Traveling Exhibition Service）は、通常その題字語であるサイト（SITE S）の名称で知られている。サイトは世界で最大の巡回展示のプログラムで、1952年に最初の巡回展を企画・運営して以来、数千にも及ぶ展示をアメリカ各地だけでなく、一部は国外にも巡回させてきた。平均すると、年間約50ほどの展示を巡回させている。サイトでは、展示を専門とする博物館や美術館だけでなく、図書館、科学館、歴史協会、動物園、水族館、コミュニティ・センター、学校などを受入団体の対象としてきた。

そのため、受入団体がもつ展示場やスタッフの制約、興味の対象に対応するため、様々な規模や内容の巡回展示を制作している。大規模な博物館を対象にした大型展示を巡回させることもあるが、それらはむしろ例外的であり、借り入れ費用が安く、軽量で、しかも警備が少なくてすむ小規模の巡回展を数多く手がけてきた。様々なニーズに対応するため、同一テーマで規模の異なるパッケージを作成することもある。さらに、農村部ではサイトの展示が紹介されにくいという反省に基づいて、1994年からはルーラル・イニシアティブという活動を開始し、アンケート調査に基づいて、小規模なコミュニティにとってより魅力的な展示パッケージの作成にも努めている。

サイトが毎年発行する巡回展示のカタログ、アップデート（Update）には、その年に巡回中であるか、もしくは近い将来に巡回が予定されている展示の概要が述べられている。巡回中の展示は芸術、歴史と文化、自然科学の3分野に分類され、展示ごとに1～2頁をさいて展示趣旨の説明文とともに、展示パッケージの内容（展示パネルの数など）、賃借料、展示面積、展示パッケージの重量、警備の度合い、クレーン（梱包箱）の数、搬送の種類、巡回期間、担当職員の連絡先などの情報を提供している。ちなみに1997-98年度版のカタログには、合計41（芸術11、歴史と文化19、自然科学11）の巡回展示が紹介されている。

サイトが巡回する展示には、スミソニアン所属の博物館が企画した展示を、サイトのスタッフが協力して独自に作り上げるものと、アメリカ各地の博物館で企画・製作された展示の中からサイトが想定する受け手の興味に合致する展示を選択し、巡回用にパッケージ化したものの2種類がある。後者に関しては、全国の博物館や研究者から企画書が送付され、その数は一年に数百に及ぶこともある。それらの企画書を、展示のテーマ・内容、製作コスト、資料の貸与条件、搬送、保険などの項目を考慮して、年間4回に分けて審査・選択する。そのようにして選ばれた企画は、展示パッケージ作成の目処がつくと、上記のカタログ誌上で紹介し、受け手側に誘致希望があるかどうかを伝えるように要請する。これは、実際に展示パッケージを作成するかどうかを決める一種の市場調査で、反応の如何によっては展示の内容を修正したり、時には企画自体を中止することもある。

サイトの展示パッケージを特徴づけるのは、その包括性である。受け入れ側が、展示の経験や有無や予算の大小にかかわらず、滞りなく展示が出来るようにパッケ

ージ化されている。展示物を搬送するクレートは、すべて展示パッケージごとに新たに作られ、他の博物館からのクレートとの混同を防ぐために、職員がサイト・イエローと名付けた明るい黄色に塗られている（写真1）。サイトは、展示物の搬入に立ち会い、経営を監督するスタッフを現地に送り込むことは原則として行わない。経費を削減するためである。そのため、クレートの中には、矢印や番号が付けられていて、素人でも展示物などを破損することがなく、また安全に出し入れできるように工夫されている。（写真2）このクレートおよび展示に使うパネル類はすべて、スミソニアンの博物館展示の技術を一手に引き受けている展示工房(Office of Exhibits Central)が製作している。サイトの展示は3カ所へ巡回



写真1 黄色に着色されるクレート

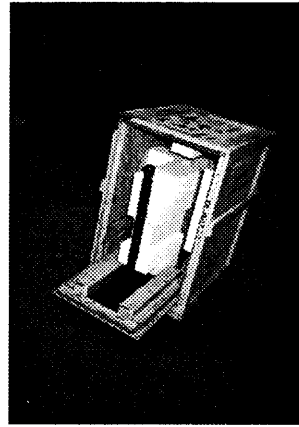


写真2 小型クレートの内側

するたびにサイトに戻ってくる。巡回中に発生する展示物の破損や摩耗の修復もこの工房で行う。サイトは出来るだけ簡単な展示パッケージ作りをめざしている。このため、芸術・自然科学関係では立体的な展示物を中心に構成される展示パッケージも少数あるが、大多数は平面的な展示パネルを多用している。特に、民博の移動展示に最も近い「歴史と文化」の範疇に属する展示は、その大半がパネルや写真中心の展示である。床に立てる自立式のパネルはその組み合わせ方で立体感を出すことが出来るため、壁に掛ける展示パネルとともに頻繁に用いられる展示媒体である。

各展示パッケージには、3種類のフォルダーがつけられている。組立用フォルダーは、搬送や警備に関する規約のほかに、展示物のチェックリスト、展示物設営の手順を記した解説書、到着した時点でも展示品の状態を報告するためのコンディション・レポートなどが含まれている。

広報用フォルダーには、受け入れ団体の便宜を考慮して、展示に使われている解説文や、展示の案内文のサンプルが、印刷コピーとともにコンピュータ・ディスクで提供される。通常何点かの写真やスライドもこれに加えられる。つまり、展示の

担当者が広報の経験がない場合やスタッフが不足している場合でも、ディスクで提供されている広報用紹介文に日時や場所を書き加えるだけで、各地域のプレスに容易に情報を送ることができる。もっとも、サイトでは、各地域における特色を出すために、受け入れ側の能力にしたがって、サイトが提供するテキストを自由に書き換えたり補足することも許可している。展示のための資金調達を各地域で行う際にも、これらの文章を用いることが奨励されている。

受け入れ側が、展示関連の行事・プログラムを企画する際に必要な情報が含まれているのが教育フォルダーである。展示の紹介リーフレット（または図録）、展示に関する新聞・雑誌などの記事および論文コピー、ポスター、講演者のリスト、文献表、語彙集などが含まれる。リーフレット類は、所定の数パッケージの一部として提供されるが、それ以上必要な場合はサイトから購入できるようになっている。サイトは巡回展が終了すると、受け入れ団体に成果レポートを提出するように義務づけている。レポートには、入館者数、地域における資金援助の有無、配布資料の有効性などの質問と並んで、受け入れ団体による展示の補足・拡充とコミュニティの参加の2項目について、特に多くの質問事項が掲載されている。受け入れ団体の所蔵品を展示に使ったか、もしそうであれば何点使用したか、サイトの巡回展示パッケージとどのように組み合わせたか、地域コミュニティがどのように展示プロセスに参加したか、展示の経験や展示を通じて生まれた新しいネットワークが将来の活動にどのような影響を与えそうか、などの質問である。サイトの巡回展示を利用して展示を企画・運営するプロセスが、受け入れ団体や地域コミュニティにどのようなインパクトを与えているか（展示を見た人たちの反応、地域に密着した展示物を組み合わせることの有効性などを含む）について、サイトはこのようなレポートを通じて恒常的に情報収集している。

3. サイト展示の実際

ここまで、展示の送り手としてのサイト・プログラムの概要を述べたので、次にサイトの巡回展示が開かれている展示場を実際に訪ねて見ることにする。

アメリカ史博物館の「ウェイド・イン・ザ・ウォーター」展

アメリカ史博物館（National Museum of American History）は、スミソニアン協会に所属する博物館の一つで、ワシントンDCのスミソニアンの博物館群が林立し

ている地域（通称モール）の一角にある。サイツの事務局のあるリプリー・センターからも目と鼻の先である。サイツの巡回展示は、先に述べたように、スミソニアン所属の博物館が企画する展示をもとにして構成されたものも多く、その際地方へ巡回する前にスミソニアン博物館で展示される。アメリカ史博物館で開催されていた「ウェイド・イン・ザ・ウォーター Wade in the Water（水の中を進め）」展はその一つである。「アフリカ系アメリカ人の聖なる音楽の伝統（African American Sacred Music Traditions）」の副題を持つこの展示は、アフリカ系アメリカ人社会に伝わる奴隷の歌、スピリチュアル、ゴスペルなどが、どのように彼らの自由への渴望を表し、社会的平等を獲得する闘争を継続するための精神的な支えと成ってきたかを紹介している。また、この音楽伝統が、現代アフリカ系アメリカ音楽文化にどのように連続しているかも重要なテーマの一つとして取り上げられている。アメリカ史博物館の一展示室で開催されていた、「ウェイド・イン・ザ・ウォーター」展の入り口に近づくと、フィスク・ジュビリー・シンガーズが歌うスピリチュアルが聞こえてくる。予備知識なしに展示を見る場合でも、この展示のタイトルが、実はこのスピリチュアル歌詞に由来することがここ了解される。有名なアンダーグラウンド・レイルロード（秘密列車）を使って300人以上の奴隷を北部に逃亡させたハリエット・タブマンが、「振り返らずに自由に向かって歩め」という意味を込めて歌ったとされるこのスピリチュアルは、この展示全体の内容を集約しており、来館者を展示場の中へと効果的に誘う（写真3）。

中に入って全体を見回すと、フロアの数箇所を立てられて自立式のパネル群と、四方の壁沿いにおかれてあるいくつかの立体的な展示物に気がつく。中央にS字状に（上から見ると）立てられているパネル群は、ほかの展示パネルより明るい色が使われ、証明もほかのエリアに比べて若干明るい（写真4）。はっきりとした導線はないものの、観覧者の多くは最初にこのパネル展示に引き付けられる。

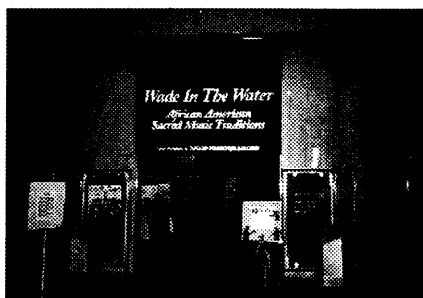


写真3 「ウェイド・イン・ザ・ウォーター」展の入口

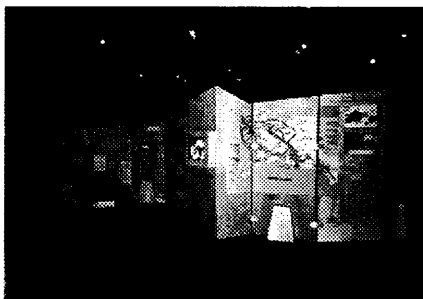


写真4 会場の中央におかれたS字状パネル群

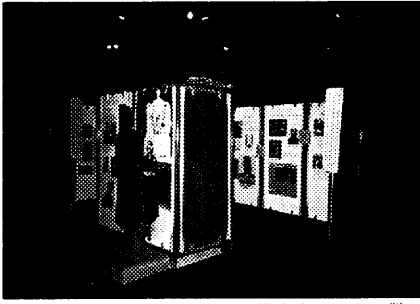


写真5 展示エリアの一つを構成するパネル群

このパネル群の両側を使って、奴隷の歌などアフリカ系アメリカ音楽の最初期の音楽形態を紹介している。このS字状パネルの周りに4つのパネル群が立っている。それぞれ、上から見るとほぼ長方形になるようにパネルが組み合わせられ、一つの展示エリアを構成する(写真5)。これらの4つのパネル群は、展示を

構成する4つのテーマ(スピリチュアル、教会音楽のルーツ、初期のゴスペル作曲家、コミュニティ・ゴスペル)に対応している。展示エリアに入ると、各テーマが、解説文、写真、地図、イラストなどを組み合わせて紹介されている。各展示エリアの小テーマを代表する音楽が、展示パッケージについてくるデジタル・プレイヤーから流れている。音楽はパネルで囲まれている部分で音量を絞って流されるため、他のエリアを見る際に邪魔にならないし、展示場全体も騒がしい印象を与えない。

部屋の四方の壁沿いには、立体的な展示物が展示されている。当時発売された黒人音楽のレコードを数多く並べて展示してあるガラス・ケース、教会の礼拝時に音楽を演奏したオルガンなどの楽器類、当時のラジオとラジオ放送の様子を伝える大型写真(写真6)などである。これらは、アメリカ史博物館によって補足された展示物で、サイトのパッケージに含まれるのは自立式のパネル群、デジタル・プレイヤー、入り口に置かれている2つの小机だけである。「ウェイド・イン・ザ・ウォーター」展の巡回展示パッケージは、もともとアメリカ史博物館がサイトとともに企画した。各地域に巡回する際には、受け入れ団体が該当地方の特色を生かした関連行事を企画することや、展示物を追加することによって展示を補足することが奨励されており、斬新で創造的な展示の組み立てが期待されている。この観点から

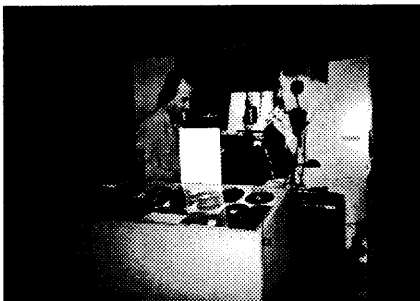


写真6 サイトのパッケージを補足する展示物や写真

見ると、私が見たアメリカ史博物館での展示は、サイトの展示パッケージを基礎として展示を組み立てる一つのモデルを提供しているとも考えられる。サイトは、パネル群の配置について何ら制約を与えていない。受け入れ団体の展示スペースが、大きさ形ともに多様なため、前もって決められた配置プランを一

律に押し付けるのは実質的に困難である。しかし、既製の展示パッケージを利用しながらも、受け入れ団体がただそれを機械的に展示するのではなく、自らの想像力を生かして能動的に展示を構成することをサイトは期待しているようだ。

サイトの巡回展示「ウェイド・イン・ザ・ウォーター」の企画は、1994年に全米公共ラジオ（National Public Radio）で放送された同盟のラジオ番組シリーズから生まれた。この番組を監修・制作したバーニス・ジョンソン・レーゴン博士（Bernice Johnson Reagon）は、アフリカ系アメリカ人の音楽文化の優れた研究者であるとともに、国際的に有名なアカペラ・グループ、スウィート・ハニー・イン・ザ・ロック（Sweet Honey in the Rock）のリーダーでもある。「ウェイド・イン・ザ・ウォーター」展は、好評だった同名のラジオ・シリーズを、レーゴン博士がアメリカ史博物館とサイトの協力を得て制作したものだ。彼女は、アフリカ系アメリカ人の音楽文化の紹介に多角的に関わっており、上記のラジオ番組シリーズが放送された年には、この番組を教材として使えるようにエデュケーターズ・キットを作成した。このキットには、レーゴン博士による解説のほか、ラジオ番組で使われた音楽が収録されているカセットテープ4本、写真、歌詞集、ディスコグラフィ、ディスカッション・テーマのリストなどが含まれ、全米公共ラジオから購入することができる。

コロラド・スプリングス博物館の「プレーリー・スクールハウス」展

サイトによって準備され、パッケージ化された巡回展示は地方の受け入れ団体によって実際にどのように利用されているのだろうか。この実態を見るためにワシントンDCから、コロラド州の州都デンヴァー市に飛んだ。スミソニアン協会のホームページにアクセスすると、サイトが企画した巡回展示が、どこでいつ開催されているかがわかる。私の短いアメリカ滞在中に、サイトの巡回展示の受け入れ団体として実際に展示を行っていた博物館の一つが、デンヴァー郊外にあるコロラド・スプリングス市にあった。

コロラド・スプリングス市は、デンヴァーから車で南へ1時間ほど走ったところにある、人口約20万人ほどの小都市である。途中で、右手にアメリカ空軍アカデミーの壮大で鋭角的な建物が見える。このアカデミーはアメリカ軍のエリート養成所として有名であり、ここが舞台となったトム・ハンクス主演のハリウッド映画「ト

ップ・ガン」(1986年)が大ヒットしてからは多くの観光客でにぎわっている。また、コロラド・スプリングズ近郊は一年のうち平均すると310日が快晴と言う恵まれた気候のため、今世紀初頭までは結核患者の療養所としても知られていた場所だ。

コロラド・スプリングズ博物館 (Colorado Springs Museum)は、フルタイムの職員が13人の小規模な博物館である。サイト・プログラムで巡回している展示が、地方の小さな博物館で実際にどのように活用されているか、また受け手側にどのような要望があるのかを調べるには最適の博物館であった。民博における移動博物館の受け入れ団体として、小さな博物館や地方団体が主として想定されていたため、アメリカでのサイトの展示を利用している受け入れ団体の率直な意見を参考にしなかったからだ。事前に協力を要請してあったイベント・コーディネーターのマット・メイベリーさんが、非常に丁寧に時間をかけて館内を案内してくれた。これは筆者のような国外からの訪問者が希であるからではなく、コロラド大学で歴史学を学び、自ら地方史研究に打ち込んでいるメイベリーさんの展示に対する熱意の表れであったようだ。

コロラド・スプリングズ博物館は、1937年に開館した市立博物館である。現在の建物は、1903年に建てられたエル・パソ郡の裁判所の建物を改装して1979年にオープンした(写真7)。同博物館では毎年6~8回の特別展示を行い、その多くがサイトなどで企画された移動展示である。サイトの他には、合衆国の西部地域に関係の深いテーマで展示を企画するニュー・メキシコ博物館の巡回展示や、カンサス・シティにあるスミス・クレマー社の移動展示を借り受けることが多い。スミス・クレマー社は、サイト同様博物館における企画展示をパッケージ化して巡回させているが、サイトが国からの様々な援助で成り立っている公的機関であるのに対し、営利を目的とした企業の一つである。

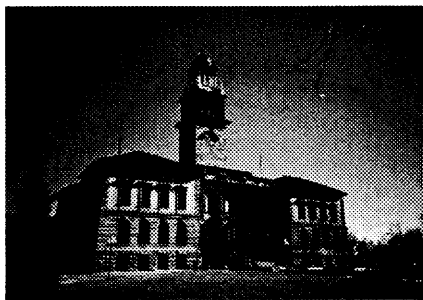


写真7 コロラド・スプリングズ博物館

私が訪ねた時に開催されていたのは、「ブレイリー・スクールハウス」展(1997年11月~1998年2月)である。この展示の貸出期間は6週間を単位(1期)としているため、2期続けて借り出していた。この展示はもともとニュー・メキシコ大学のマックスウェル人類博物館(アルバカーキー市)が企画した展示をも

とにしてサイツが移動展示用にパッケージ化したものである。

「プレーリー・スクールハウス」展は、1885年から1940年にかけてアメリカ合衆国西部で農地開拓を行ったパイオニアたちが作った学校の建物の写真で構成されている。西部の草原地帯（プレーリー）におけるこれらパイオニアたちの生活は、大恐慌以来徐々に姿を消し、残された学校の建物（スクールハウス）だけが当時の生活の面影をとどめているにすぎない。そのような学校の一つで実際に少年期を送ったジョン・キャンベルは、後に人類学者・写真家となり。西部14州に残る60の学校の建物を数多く白黒写真に収めた。この中から厳選された40枚の写真がサイツの展示パッケージの主な展示物である。パッケージには、写真のほかにタイトル・パネルと地図のパネルが各1枚、解説パネル6枚、入り口に置く小机2つが含まれる。写真が中心の展示キットであるため分量も少なく、立体的な展示物は全く含まれてない。

コロラド・スプリングズ博物館では、建物の二階入り口を入って右手にある200平方メートルほどの部屋が特別展示の会場として使われている。「プレーリー・スクールハウス」展もこの部屋に展示されている。展示場に入ると、正面に展示のタイトルと一枚の写真がかけられているのが目に入る。その下には当時使われていたイスと机が置かれている（写真8）。ここではサイツの展示パッケージから博物館が選んだ教室内の写真と、コロラド・スプリングズ博物館が所蔵しているイス・机が組み合わされている。この導入部はこの展示の構成をよくあらわしており象徴的だ。

基本的には、この部屋の四方の壁にサイツからの写真とパネル類が展示され。壁に囲まれた空間にはコロラド・スプリングズ博物館が補足した数多くの展示物が置かれている。写真と立体的な展示物という違いはあるものの、これらの2種類の展示物は、展示においてほぼ平等のウェイトを占めている印象を受けた。中央には学校の教室の様子が当時使われていた黒板や机などを使って復元されており、その周辺にも教科書や教材などが数多くガラスケースに収められ展示されている（写真9-10）。これらはすべてコロラド・スプリングズ博物館の収蔵品であるか、この展示を補うために地域の住民・コレクターから借り受けた品物であ

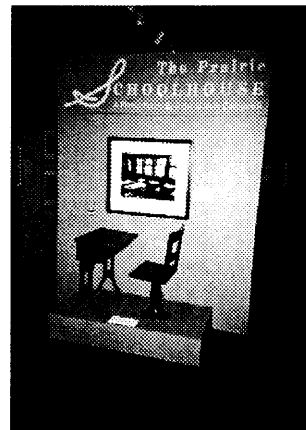


写真8 「プレーリー・
スクールハウス」展の導入部

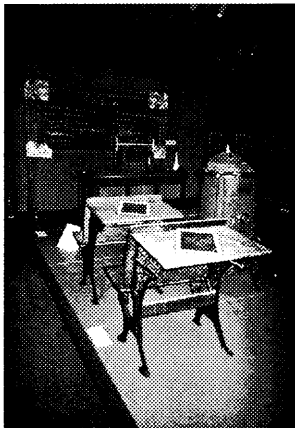


写真9 中央に当時の教室の様子が再現される



写真10 教科書、教材の展示

り、コロラド州で使われていたものがほとんどである。これらの「ローカルな」展示物の存在によって、地域の来館者はキャンベルの写真が映し出す風景を身近に感じ、コロラドにおけるパイオニアの生活を西部プレーリーという広大な地域の中に位置づけることが容易になるはずだ。

ここでは、サイツの展示パッケージを核にしながら、受け入れ側の博物館がもつ収蔵品を組み合わせ、また民間の研究者や収集家の参加を促し、各地における地方史への関心を高めるといふサイツの理念が実践されているといえる。

サイツは、展示に関する講演者のリストをパッケージの一部として配布するが、コロラド・スプリングズ博物館では、その他にも地域の研究者を招いて、コロラド州に来た初期

のパイオニアたちの生活に関する講演会などを計画していた。そのような各地域における展示関連の行事・イベントはサイツにフィードバックされる。このような中から、全国的には知られていないが、その展示に関して興味深い話のできる地方在住の研究者をサイツが「発見」し、展示パッケージに入れられる講演者リストに追加することもある。

メイベリーさんが特に重宝しているのが、サイツの教育フォルダーである。サイツは、他の巡回展示プログラムに比べ、展示に関する情報を、文献表、関連記事、論文の形で多く提供している。展示の内容に関する情報は多い程良いことを彼は強調した。受け入れ側は、最終的にその情報をすべて利用するわけではないかもしれないが、情報が多い程行事・イベントを企画する際の可能性が広がるという点で有効である。また、展示場で解説などを行うボランティアのオリエンテーション用資料や、子供、学生、家族連れといった特定の来館者に対する解説案内のサンプルも教育フォルダーに含まれることが多く便利である。

4. プログラム運営の3つの条件

巡回展示プログラムの運営が、博物館の使命をよりよく果たすための有効な手段であるという認識が、私の訪ねた博物館では共有されているように思われた。ニューヨークのアメリカ自然史博物館のように、すでに巡回展示プログラムを運営している博物館もあったが、他にも同様のプログラムを始める計画を持つ博物館が多く、シアトル市のウィング・ルーク博物館のように、実際の実現のために外部に調査を依頼したり、実験的に展示を巡回させたりして準備を進めている博物館が数カ所あった。

巡回展示の企画・運営に関して、私が話を聞くことのできた関係者の意見を整理すると次の3点に集約される。

非営利目的

財政が逼迫する博物館が多い中、増収目的に巡回展示プログラムを始める博物館があるが、これらはほとんどの場合失敗する。サイツのプログラムは、政府や企業からの援助金無しでは成立せず、受け入れ団体が展示を借り受けるために支払う参加費は、巡回展示プログラムに必要な運営費のごく一部をカバーするにすぎない。ただし、展示を巡回することによって博物館の知名度が上がり、また知識を広く公に提供するという公的実績をあげることによって資金援助を受けやすくなるといった長期的・間接的な経済効果は見込めるであろう。

専任職員の配置

私が接触した博物館の担当者は、ほとんど例外なく専任職員の重要性を強調した。展示経験のない（または少ない）団体を受け手と想定する限り、博物館関係者には常識とされている知識や受け入れ態勢を期待すべきではない。従って、このような巡回展示プログラムを継続的に運営するには、細部にまで気配りが必要であり、他の職務を持つ館員だけで対応するのは不可能であるという意見である。受け入れ団体の要望や置かれた状況はそれぞれ異なるため、緊密なコミュニケーションが重要である。

また、展示パッケージが現地に着かなかったり、展示物が不慮の事故で破損するといった緊急事態に早急に対処するためにも専任のスタッフが必要である。ちなみ

に、年に約250箇所で開催を行うサイトが、50人以上の専任スタッフを抱えている事実は示唆的である。

館内の協力体制

専任の職員がいる場合でも、博物館全体の協力体制が確立していないと成功しないという意見も頻繁にきかれた。巡回展示プログラムの運営は、当初の予想を超える物的・人的資源が必要であり、担当職員の努力にだけ依存することはできない。そのため、巡回展示が館全体にとって重要な活動であるというコンセンサスの形成が必要である。

5. おわりに

サイトは、自己の巡回展示プログラムの目的を、「スミソニアン協会が持つコレクション、研究成果、展示に関する専門的知識を国内外の様々な場所（サイト）に送り届ける」ことにあると明言している。(SITES 1997:iv)しかし、展示・情報などの一方的な流れを想起させるこの宣言で表現されていないのは、巡回展示を通してサイトと受け入れ団体・コミュニティとが作り出す連携、またはその可能性である。私には、この点がサイトの巡回展示プログラムの最も大きな特色であるように思える。

サイトの巡回展示プログラムは、製作された展示を単に複数の異なる場所へ移動させて紹介するだけではない。サイトは多くの情報を提供するが、それをどのように使うかは、受け入れ団体の意志や能力に委ねられている。サイトの展示パッケージを素材にして、様々な展示の組み立て方が可能であり、そのプロセスを通して受け入れ団体は展示を企画・運営する技術を学ぶ。そこで得た知識と経験はサイトにフィードバックされ、それ以後の企画・運営にいかされると同時に、受け入れ団体が将来サイトと関係のない展示などを行う際にも役立っている。サイトの巡回展示プログラムの成功をこれまで支えて来たのは、連邦政府や企業からの資金援助や、それに裏打ちされた豊かなスタッフの配置だけでなく、展示を準備・運営するプロセスと、その結果として開催される展示とが等しく重要であるという視点であった。この視点こそ、同様のプログラムを開始する際の重要な鍵を握っているように思われる。

注記

1) お話を伺ったのは次の方々である。ここにお名前を記して感謝の意を表します。カール・ハタラー、ダイアン・クウィン（バーク博物館）、サラ・ラウドン（シアトル美術館）、シャーリーン・マノ、キャシー・チン（ウイング・ルーク博物館）、フレドリック・ウィリアムス、マーサ・シーウェル（スミソニアン協会、巡回展示部）、レイチェル・バーンハート、デイヴィド・クレヴァン（ホロコースト記念博物館）、マリー・テレーズ・ブランカール（全米美術連合）、マット・メイベリー（コロラド・スプリングズ博物館）、マリア・ガルシア（デンヴァー美術館）、ローラ・ブラウン、クローデット・ウオーレス（デンヴァー自然史博物館）

参考文献

Colorado Springs Pioneers Museum.

1997. *MuseLetter* 8/6

Lee-Nguyen, Sylvia.

1997. A Show on the Go?!: A Report on Operating Traveling Exhibit

Program for the Wing Luke Asian Meseum. Unpublished report.

SITES(Smithsonian Institution Travering Exhibition Service).

1997. *Update:1997-98*.